

こども芸術学科はどこから来てどこへ行くのか

～こども芸術学科の来し方と可能性～

浦田 雅夫*

はじめに

京都造形芸術大学（本学）芸術学部こども芸術学科は2007年4月に開設された。この間、2018年3月に卒業した8期生まで合わせて203名を社会に送り出した。こども芸術学科誕生から10年を経て、このたび、本紀要の発行を機にこども芸術学科の来し方をふりかえり、今後の可能性について考えてみたいと思う。

1. こども芸術学科開設にむけたプロローグ

本学こども芸術学科開設に至るプロセスにはどのようなものがあったのだろうか。これまで本学では、「子ども」と「芸術」を結ぶ、どのような取り組みが行われてきたのか。そこには、学園のどのような思いがあったのだろうか。

(1) 児童図書館の運営による地域子育て支援

本学の前身である京都芸術短期大学が開設された翌年の1978年7月、児童図書館が誕生した。大学が地域社会貢献として、何ができるかと考えた結果、具現化されたものである。「子ども」に注目したのは、学校法人瓜生山学園初代理事長、徳山詳直の思いである。児童図書館では、単に図書の貸し借りでだけでなく、工作会や映画会、またキャンプなど、そこに集う子どもたちの成長発達を支えるプログラムが展開されてきた。また親子や親同士の支え合いの場としても機能してきた。「子育て支援」、「親支援」がいまほど注目されず地域に親子で集える場も多くないなかにおいて、この児童図書館の役割は大きかったと思われる。「本」が子ども同士を、また子どもと親を、そして親子と地域を繋いできたのである。開設から5年を経た1983年、児童図書館は「ピッコリー」という愛称を得て、現在まで「地域の子どもたちが楽しく、明るく、夢と希望に満ちた文化的環境のなかで育つことを願って⁽¹⁾」運営が続けられている。また、学生が子どもや親子と関わることのできるボランティアの場としても機能している。

(2) こども芸術大学の開設

『瓜生山学園30年史』（2010年）によると、2000年4月に「京都文藝復興」をまとめた徳山

詳直理事長は、同年7月、この「京都文藝復興」をさらに具体化するため、『こども芸術大学—未来への希望を育む拠点作りをめざして』を発表。そのなかで、「子どもたちの生存と育成に最大限の努力を傾け、子どもを育む母性を守り支援する」と決意を語っている。2002年3月には、『こども芸術大学設立の宣言〈母なる大地〉の回復を願って』が出された。この宣言文は、後に『母なる大地の回復を願って』と要約され、こども芸術大学の基本理念となっている。

今、なぜ、こども芸術大学か

永い人類史の歩みの中で人類をあたたく育んできた、
命あふれる大地、豊穡の海、澄みわたった大気。
それら地球的な母性に大きく抱かれて、
人類は世代から世代へと生の営みを紡いできました。
しかし、いつしか人間は近代文明の申し子である果てしない
欲望の虜となり、
やがて自らを生き育ててきた「母なる大地」を傷つけ、
破壊し尽くすに至りました。
いかにして、新しい生命に対する深い愛情を取り戻し、
私たちの心の中に「母なる大地」を回復するか。
人類の未来は、この一点にかかっているのです。
こどもたちに、お母さんの体内で生まれて今日あることの意味を語りかけたい。
お母さんたちとともに「母なる大地」について語り合いたい。
宇宙、地球、人間、
そうしたテーマを持ちながら、こどもたちに接し、
お母さんたちとともに生きられるような、
そんな環境をつくりだしたい。
長年にわたり培ってきた地域のこどもたち、母親たちとのつながりをいっそう深め、
幼児から学生・社会人にまで連なる一貫した芸術教育、
すなわち人間教育の基礎をなす将来像を見据えつつ、
こどもと母親のための教育機関、
「こども芸術大学」の設立を試みたいと思います。

(徳山詳直「母なる大地の回復を願って」)

(3) こどもこそ未来

2002年3月の徳山詳直理事長による、こども芸術大学の設立に向けた宣言以降、本学では、こども芸術大学開設にむけての準備が着々と行われ、2005年4月、幼稚園でも保育所でもない3

歳から5歳児とその母のための教育機関として、こども芸術大学は誕生し、11組の親子を迎え入れた。なお、こども芸術大学は、本学と姉妹校にある東北芸術工科大学にも同時に開設されている。

さて、こども芸術大学の開設の半年前、2004年10月徳山詳直理事長は『京都文藝復興から日本の藝術立国をめざして—新5ヵ年計画の策定にあたって—』を発表し、子どもに対するその熱い思いを語っている。

こども芸術大学と本学大学院が入る本学「未来館」には、徳山詳直理事長の直筆による「こどもこそ未来」という7文字が刻まれている。児童図書館やこども芸術大学の開設は、ときに、内外からの批判も受けていたようだが、なぜ、これほどまでに、徳山詳直理事長は「母と子」を支えることに心血を注いできたのだろうか。

徳山詳直理事長は著書『藝術立国』（2012年）の第2章「隠岐島と母親に育まれた少年時代」のなかで、戦時下、父が中国大陸へ赴任していたため、自身の幼少期は、事実上、母子家庭であったこと。しかし、そのなかにおいて、貧しい生活環境ではあったが、隠岐島の自然や母が自身の人格形成に大きな影響を与えたことを記している。厳しい島での生活は、人間というもの、「自然」に抗うことができないという絶対的な体験を、そして幼児期、苦勞しながらも育ててくれた母への感謝を魂に持ち続けていたことが基底にあるのではないだろうか。

なぜ、わが大学はこども芸術大学に取り組もうとしているのか。

そのことをもう一度振り返っておきたいと思います。

最も基本的なことは、子どもこそ、人類の未来そのものだという事です。

その子どもたちを守り育てていくことは、

未来に向かって希望を育てていくことにほかなりません。

いつの時代も、戦争や貧困や飢餓によって最も大きな犠牲を払わされるのは、

子どもと母親たちです。この日本でも、冒頭で述べたとおり、

子どもたちは形容しがたいほど困難な状況に置かれています。

その子どもと母親が、いっしょになって自然に学び芸術に触れ、

喜びと楽しみのうちに成長をとげることができる環境をつくっていく。

それは、20世紀の矛盾を克服し、平和で幸せな社会を実現するための、

極めて実際的な試みでもあります。（～略～）

こども芸術大学は、藝術立国をめざすわが大学にとって、

いわば良心というべき存在です。大学院棟の中にこども芸術大学の校舎を

置いた理由も、まさしくその点にあります。若き芸術家や教師、学生たちが、

こども芸術大学で活動する子どもと母親の姿に日々出会うことによって、

常に、芸術とは何か、平和とは何か、人間にとって幸福とは何か、

という根源的な問いに向き合ってくれることを、強く願いたいと思います。

（徳山詳直「京都文藝復興から日本の藝術立国をめざして—新5ヵ年計画の策定にあたって—」）

2. こども芸術学科の誕生

2005年4月のこども芸術大学の開設後、同年12月の常任理事会で「こども芸術学科」新設の構想が水野哲雄教授（後に初代学科長に就任）により提案された。

水野がこども芸術学科設立の趣旨のなかで述べているものの一部を紹介したい。

「こども芸術学科」は、「こども」「芸術」「教育」をキーワードにこの直観を具体的、実践的なカリキュラムへと実行し、芸術による人間教育という理念の現実化にチャレンジします。ここでいう「こども」とは、幼児や児童を指すだけではなく人間にとっての「こども性」を象徴しています。生来のこどもが持つ、輝く瞳の力や、囚われなくて接する力、さらに希望や未来を信じ疑わないう力といった、これらのこども性は、人間にとって芯ともいえる心性です。こどもというしなやかな芯を忘れた大人が増え、その結果、大人びたこどもが増えていくという状況にあって、「こども性」を問うことは、人間の成長発達や学校教育を超えて「人間とはなにか」を教え育むことの課題です。「芸術による人間教育」は、この課題を直視し、正視することにほかなりません。

（水野哲雄「『こども芸術学科』の設立に向けて」）

（1）こども芸術学科における教育の独自性

常任理事会での承認後、こども芸術学科開設にむけた準備委員として、水野哲雄教授、森本玄助教授（当時）を中心に学科の骨子が構想され、2006年からは、梅田美代子教授、岸本栄嗣専任講師（当時）、大橋喜美子教授、有井悦子教授がそこに参画している。カリキュラム構成では、デザインや造形表現という芸術表現に加え、厚生労働省の基準による保育士養成のカリキュラムが導入されることになった。また、「こどもとあそび」、「こどもといのち」、「こどもと社会」等の独自科目の開設も行い、2007年4月こども芸術学科は新設された。

デザインだけではなく、絵画だけでもなく、立体だけでもなく、保育と芸術を総合的に学ぶという全国に例をみない学科に、1期生は全国津々浦々から集まった。

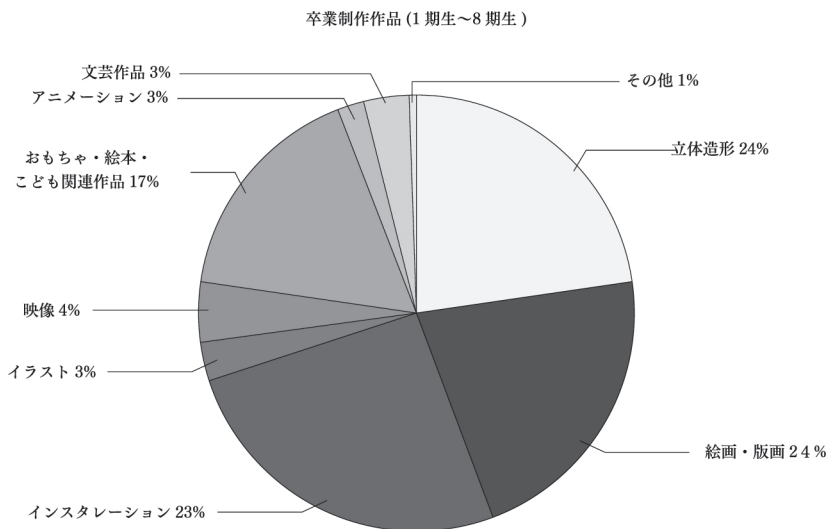
こども芸術学科1期生で、現在、こども芸術学科の副手である大塚美沙妃は当時をふりかえり、「芸術系の授業のなかでは、日々、常識を疑い、試行錯誤しながらも制作し続けることを、保育系の授業のなかでは子どもたちを見守り、よりそうことの大切さを学んだ。」と語っている。

大橋喜美子教授の退職後、2009年4月からは、平野知見専任講師（当時）と浦田雅夫専任講師（当時：筆者）が採用され、本格的に始まった保育実習の担当にあたった。保育士養成カリキュラムでは、学外での保育実習が必修であり、保育所をはじめとした児童福祉施設の受け入れ協力がなければカリキュラムは成立しない。保育実習は、保育所に10日間、保育所以外の児童福祉施設に10日間、さらに保育所または保育所以外の児童福祉施設で10日、合計30日間に及ぶ。各実習先では、芸術大学で保育士養成を行うことへの驚きや、「真に保育職を目指すのか」等の声も多く聞かれたが、実習では、おおむね各施設から歓迎され丁寧な指導を受けることが多かった。

なお、この間、2010年4月には大阪芸術大学に初等芸術教育学科が開設されている。

さて、2007年4月に入学したこども芸術学科1期生は2011年3月に卒業を迎えた。こども芸術学科が他の養成校と大きく異なる点のひとつに、「卒業制作」がある。卒業の節目、他の一般大学や保育士養成校等では、「卒業論文」が通常であるが、こども芸術学科では保育を学びながらデザインや造形表現を行い、卒業年次ではノンジャンルでの制作が許された。したがって、最終表現形態の多様性（もちろん論文も可）は、他大学との比較だけではなく芸術大学である本学の他学科と比較しても相当に独自性がある。卒業制作の指導についても独自で、芸術系と保育系の教員がそれぞれ2人1組となり3つのゼミを展開した。

表1 こども芸術学科の卒業制作ジャンル（n=202）



(2) こども芸術学科で取得可能な免許・資格

こども芸術学科では、地域における児童館の役割や機能がこども芸術学科の志向性と有意に結びつくこと、また保育士資格に若干の科目を追加すれば取得で可能であったことから、2012年度より保育士資格に加え児童厚生一級指導員資格⁽²⁾の導入を行った。

一方で、小学校就学前を中心とした保育職の進路を考えた際、当時、増え始めた「幼保連携型認定こども園」では、原則として幼稚園教諭一種免許状と保育士資格の2つの免許・資格が必要であること、また、公務員保育職の受験要件として、2つの免許・資格の保持が前提となる自治体がみられた。このことから、保育士資格と合わせて幼稚園教諭一種免許状の課程認定を受けるか否が課題となった。結果として、学科では、デザインや芸術系の授業時間を確保しつつ、幼稚園教諭一種免許状を導入することは、さらなる単位数の増加を招くことにはなるが、保育職をめざすものの進路保障のため、2013年に幼稚園教諭一種免許状課程申請にむけた準備をはじめ、2014年4月から幼稚園教諭一種免許状課程が文部科学省から認定を受け、保育士とあわせ幼

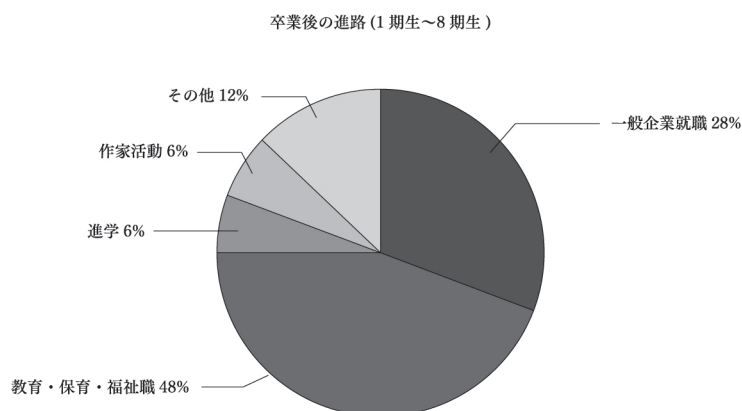
幼稚園教諭一種免許状の取得が可能となった。同年より、蜂谷葉子准教授、行成美和講師が、さらに翌年には村山修二郎講師が着任した。

なお、幼稚園教諭一種免許状課程認定により、これまで取得可能であった中学校教諭一種免許状（美術）、高等学校教諭一種免許状（美術）は返上することとなった。また、児童厚生一級指導員資格についても、カリキュラム再編に伴い、2018年度をもって返上している。社会福祉主事任用資格については、引き続き、学科のカリキュラムで取得が可能である。

(3) こども芸術学科の卒業後の進路

こども芸術学科では、2011年3月に1期生を送り出して以降2018年3月まで、203名の卒業生がいる。進路については、表2の通り約50%が教育職、保育職、福祉職についている。

表2 こども芸術学科卒業後の進路（n=203）



3. こども芸術学科の課題と展望

(1) こども芸術学科の課題

こども芸術学科開設当初から、保育士資格養成課程による科目履修と平行してデザインや芸術を学び制作し続けることの有機的な統合はこども芸術学科にとって大きな課題であった。2014年度より幼稚園教諭一種免許状課程が増え、履修すべき単位数は相当に増えている。学外実習については、保育実習合計30日間に加え、幼稚園での教育実習が合計4週間増加した。学外実習の前後には綿密な事前事後指導も必要となる。本学では、2013年度入学生よりCAP制（履修登録の上限単位）が導入されており、前期24単位、後期24単位、合計48単位がその上限となっている。しかし、こども芸術学科は特別に1年次（2018年度入学生）においては、前期29単位、後期24単位、合計53単位が上限となっている。教職課程である幼稚園教諭一種免許状課程の導入により、こども芸術学科のカリキュラムの中心は幼稚園教諭、保育士資格関連の科目になっ

ているが、それに加え独自の芸術系科目も平行して履修することを求めている。これらは、他の養成校に類を見ない、こども芸術学科の独自性である。しかし、これらの科目を履修していくためには、学生の粘り強い学習とモチベーションが求められ、それを支える教員の指導体制も重要になっている。

また、これまでは、全く自由に制作することが許されていた卒業制作について、「果たして、自分の思うように好きなモノを描いたり作ったりし、表現するだけでよいのか」というテーマにも直面している。もちろん、これまでも、芸術系の教員と保育系の教員との協働により丁寧に指導を行ってきたわけであるが、今、以上に、「教育」「保育」を念頭に入れた表現が求められるだろう。

(2) こども芸術学科の展望

2007年4月に入学した1期生から2018年3月に卒業した8期生まで合わせて卒業生は203名。先に報告したとおり、卒業生の約半分は卒業後、教職、保育職、福祉職という人の成長発達に直接的に働きかける対人援助職に就いている。また、一般企業で就労しているもののなかにも、こども芸術学科での学びが直接生かされるような場で就労しているものも多い。さらに、いうならば、どの職場においても直接、間接的に何らかの形で子どもとの繋がりがあり、そこにデザインや芸術の視点での問題解決や発想が求められるだろう。また、結婚し子どもができたものもある。育てられるものから、育てるものへ、この10年少しずつ階段を登りながら、子どもとともに学び続ける卒業生の姿もある。こども芸術学科の展望のひとつは卒業生の活躍である。教職や保育職、福祉職に就くのに、どうしてデザインや造形表現を学ぶ必要があるのか。こども芸術学科の学びがどう生かされるか、卒後の活躍を注目したい。

これまでの具体的な就職先としては、幼稚園、保育所、児童館、障害者施設、その他の児童福祉施設、社会福祉施設等があるが、子育て支援や地域活性化を担うNPO等、フロンティア精神で取り組む分野での活躍も期待できる。

また、一般企業も含めて考えるならば、遊具、玩具などのデザイン、絵本も含めた教材開発分野では、こども芸術学科の学びが生かされるだろう。

障がい者福祉分野では既に多くの卒業生がアート活動をリードし活躍しているが、益々の発展が期待できる。

おわりにかえて

2007年4月に開設されたこども芸術学科は、開設から10年を経過し、この間、学科の礎を作った、水野哲雄教授、梅田美代子教授が退職され、どちらも名誉教授に就任された。こども芸術学科では、2016年4月からニューヨークモンテッソーリスクールで経験を積んだ近江綾乃教授が着任し学科長に就任。翌、2017年4月には、元幼稚園教諭の前川豊子教授が着任した。そして、2018年4月には元滋賀大学副学長の住岡英毅教授が着任。同年、村田治彦准教授、そして本学の卒業生である彦坂敏昭専任講師を迎え、あらためて、「こども」「芸術」「教育」を問い直そう

と、このたびの紀要制作に入った。ここに筆者が記したことは、これまでのこども芸術学科の経過の一側面に過ぎず、稚拙な表現のなかでは徳山詳直理事長の深い理念、学科の礎を築いた諸先生方の思い、卒業生の思いを十分に反映することはできない。何卒、この点をご容赦いただきたい。この小論は大げさなタイトルであるが、筆者としては、引き続き、学科の教育に邁進するとともに、その取り組みを記録に残しておく作業も怠るべきではないと痛感している。

子どものよりよい環境をデザインしていくことは大人の責任である。最後にあらためて、徳山詳直理事長の思いを記したい。

「最も基本的なことは、子どもこそ、人類の未来そのものだということです。その子どもたちを守り育てていくことは、未来に向かって希望を育てていくことにほかなりません。」

注

- (1) 『京都造形芸術大学を学ぶ』刊行委員会編『京都造形芸術大学を学ぶ』2018年、pp.74
- (2) 児童厚生一級指導員は（財）児童健全育成推進財団が認定する資格である。

文献

1. 瓜生山学園 30 年史編纂委員会編『瓜生山学園 30 年史』瓜生山学園、2010 年
2. 瓜生山学園 30 年史編纂委員会編『瓜生山学園 30 年史 資料編』瓜生山学園、2010 年
3. 水野哲雄「こども芸術学科の設立に向けて」こども芸術学科資料、2005 年
4. 徳山詳直著『藝術立国』幻冬舎、2012 年

* 本文のなかでは固有名詞として「こども」と記されているもの以外について、筆者は「子ども」と表記している。